

# 物語文読解においてフォーカス・オン・フォームを 実践するための発問作り<sup>1</sup>

小 野 章

広島大学大学院教育学研究科

## 第1節 はじめに

Doughty and Williams (1998) は、フォーカス・オン・フォーム (以下, F on F) と “focus on formS” と “focus on meaning” の違いを次のように簡潔に説明している。

[F]ocus on form *entails* a focus on formal elements of language, whereas focus on formS is *limited* to such a focus, and focus on meaning *excludes* it. (p.4)

つまり, “focus on formS” がもつぱら「言語形式」(formal elements of language) に,そして “focus on meaning” がもつぱら「意味内容」(meaning) に関心を払うのに対し, F on F は言語形式への焦点化を「伴う」ものであるとしている。同様に, Long and Robinson (1998) は F on F を次のように定義している。

*Focus on Form* refers to how focal attentional resources are allocated. Although there are degrees of attention, and although attention to forms and attention to meaning are not always mutually exclusive, during an otherwise meaning-focused classroom lesson, focus on form often consists of an occasional shift of attention to linguistic code features – by the teacher and/or one or more students – triggered by perceived problems with comprehension or production. (p.23)

F on F は文字通り言語形式に焦点を当てた教授法であるが, この引用にある通り, 意味内容を軽視するものでは決してない。むしろ, F on F では, 基本的には意味内容に焦点を当てつつも, 「時として」言語形式に注意を払う。本論における F on F は, この Long and Robinson (1998) の定義に拠っている。

F on F は通常, 日常言語を対象に行われる。しかし, 本論では英語で書かれた文学 (物語文) 読解に F on F を活用する可能性を探りたい。対象作品には Oscar Wilde 作 “The Selfish Giant” の原文を選定した。選定理由は, 本論が日本の高校生を英語学習者として想定していることと関係がある。というのも, 同作品は, 現行の高等学校英語教科書 *Polestar: English Communication I* に原文のまま全編が掲載されているからである。

日本の高校生が英文学作品の原文をすらすら読めるとは通常は考えられない。そこで本論では, 読解の補助となるべき発問に着目した。以下の手順で研究を進める。

- 1 教科書 *Polestar* における “The Selfish Giant” を, 発問を中心に分析する (第2節)。
- 2 次の3で行う発問作りの前提となる “The Selfish Giant” の読解を行う (第3節)。

- 3 1の分析と2の読解を踏まえ、F on Fを実践するための発問作りを、“The Selfish Giant”をテキストとして行う（第4節）。

## 第2節 教科書における“The Selfish Giant”の分析

*Polestar: English Communication I*は全10レッスンから構成されているが、“The Selfish Giant”はこれらのレッスンとは別に“Further Reading”として掲載されている。その“Further Reading”は、原文のままの“The Selfish Giant”全編と“COMPREHENSION”から成り、全部で教科書の10ページ分を占めている。はじめの8ページ分を占める“The Selfish Giant”本文の各ページ下には、新出単語（発音記号付）と特殊な表現・表記に対する説明が付けられている。全部で5つある特殊な表現・表記に対する説明は以下の通り。

- ・ Cornish ogre 英国コーンウォール地方の人食い鬼
- ・ to-morrow tomorrow の古い表記
- ・ Who hath dared to wound thee? = Who has dared to wound you?
- ・ Who art thou? = Who are you?
- ・ to-day today の古い表記

“COMPREHENSION”は計3種類の発問から構成されている。1番目の発問は一部のみ、2番目、3番目の発問は全て引用する。

### COMPREHENSION

**Summary** Fill each blank with a suitable word.

Children used to go and play in the Giant's beautiful garden, but he did not like them (1. ) there. After the children stopped (2. ), there were no flowers or birds in the garden. After that, winter stayed there. (以下、省略)

A. standing B. crying C. visiting D. letting E. playing

**Check for Understanding** Answer the following questions.

1. The Giant is a very selfish man at first. Give an example of his selfishness.
2. Spring and summer stay away from the Giant's garden for some time. Why?
3. The Giant feels sorry about his selfish behavior. What makes him feel that way?
4. Who do you think the little boy is?

**Let's try** Work with your partners.

In small groups, put together a picture-story show of “The Selfish Giant” using five or six pictures, and perform it in front of your classmates.

5ヶ所の空所がある“Summary”の全5問と、“Check for Understanding”のはじめの3問は本文の字義理解を求めるものであり、本文から適切な英語を探せば解ける。“Check for Under-

standing”の最後の発問に対する答えは本文に明示的に書かれていない。推論を促す発問であるが、答えは“Christ”と思われる。仮にそうであるならば、特定の宗教を教科書で扱うことをめぐっては意見が分かれるところかもしれない。“Let's try”に対しては、色々なパフォーマンスが出てくることが予想される。いずれにしても、“COMPREHENSION”の発問は全て“The Selfish Giant”の内容面を扱ったものであり、言語形式への焦点化を求めるものではないという点に着目したい。本論としては、“COMPREHENSION”の発問を補うものとして、言語形式にも焦点を当てた発問を作成したい。

### 第3節 “The Selfish Giant”の読解

文学の読解は一律ではなく、読み手によって変容する<sup>2</sup>。従って、ある文学作品を対象に発問を作成する場合も、発問作成者自身があらかじめ読解を実践しておく必要があると考える。そこで本節では、本論が考える“The Selfish Giant”の読解を提示しておきたい。当然のことながら、本論が提示する読解は他の読者による読解を否定するものでは決してない旨、付言しておく。

“The Selfish Giant”は、作品半ば辺り、つまり巨人が自分の庭に「小さな少年」(a little boy)を見つける場面のあたりで大きく転換する。この場面において巨人は、わがままだったわが身を悔い改め、周りを気遣う心優しい存在へと変わるのだ。この場면을境に、作品を前半部と後半部に分け、それぞれにおける読解を提示する。

#### 第3節第1項 “The Selfish Giant”前半部の読解

“The Selfish Giant”は一貫して全知の語り手によって語られる。作品の冒頭では、その語り手が巨人の庭を次のように描写している。

##### 引用1

It was a large lovely garden, with soft green grass. Here and there over the grass stood beautiful flowers like stars, and there were twelve peach-trees that in the spring-time broke out into delicate blossoms of pink and pearl, and in the autumn bore rich fruit. The birds sat on the trees and sang so sweetly that the children used to stop their games in order to listen to them. “How happy we are here!” they cried to each other. (p.163)<sup>3</sup>

この時巨人は自宅の城を留守にしており、城の庭は子どもたちの格好の遊び場となっている。この段階における巨人の庭にはハーモニーが認められる。つまり、以下のような諸要素が調和しながら、巨人の庭を「素敵な」(lovely)ものにしてしているのだ。

「柔らかな緑の芝生」(soft green grass)

「星のように美しい花」(beautiful flowers like stars)

「桃色や真珠色の愛らしい花」(delicate blossoms of pink and pearl)

「みずみずしい果実」(rich fruit)

「鳥たちは・・・たいへん美しい声でさえぎっていた」(birds ... sang so sweetly)

「遊び」(games)

これらの要素の全てが心地よさを指向している。引用1の最後に子どもたちが「僕たちはここに居てなんて幸せなんだろう！」と叫ぶのも首肯出来よう。

引用1で見た調和が乱される時が来る。次の引用2は、巨人が7年ぶりに自分の城に戻って来た時の様子を描いたものである。

#### 引用2

“What are you doing here?” he cried in a very gruff voice, and the children ran away.

“My own garden is my own garden,” said the Giant; “any one can understand that, and I will allow nobody to play in it but myself.” So he built a high wall all round it, and put up a notice-board.

TRESPASSERS WILL BE PROSECUTED
--------------------------------------

He was a very selfish Giant. (pp.163-64) (下線筆者)

巨人の声を表現した「耳障りな」(gruff) という語に着目したい(一つ目の下線部)。この語は、引用1に散りばめられていた心地よさを想起させる諸要素とは異質なものである。それは、同じ音を表わす“sweetly”という語との対比から特に明らかである。巨人の「とても耳障りな声」、ひいては巨人の存在そのものが、これまで維持されてきた庭の調和を破壊する。

引用2の二つ目の下線部で巨人は「私自身の庭は私自身の庭である」というトートロジカルな主張をしている。このトートロジーは、三つ目の下線部のように、「自分の庭のまわりに高い壁を設け」ることで自分の庭とそれ以外とを峻別したいという巨人の願望を意味している。

最後(四つ目)の下線部に注目したい。「彼はとてもわがままな巨人であった」という評価が全知の語り手によって下される。そのような評価の根拠は、巨人が自分の庭を独り占めしたことにある。しかし、私有地を自分のものだと主張すること自体には法律上問題はないはずであり、ゆえに巨人も「立ち入ったものは法的に訴える」という文言の看板を立てたわけである。それでも巨人を“selfish”だとする語り手の評価から、われわれ読者は、たとえ自分の持ち物であってもそれを独り占めすべきではないというメッセージを読み取る。しかし、巨人はそのメッセージとは裏腹に、自分のものと他人のものを峻別すること、つまり自と他の間に境界線をはっきりと引くことを主張してやまない。

これまでの読解をまとめよう。引用1では巨人の庭は調和を保っていた。換言すると、庭に含まれる諸要素は互いに対立することなく、むしろ補完しあいながら全体の調和を保っていた。その調和は巨人の帰宅によって破壊される。調和に代わって、引用2では、美しい音／耳障りな音、壁の内／外、自／他といった対立的な要素の存在が認められるようになる。次に見る引用3以降でも対立的な要素の提示が続く。

引用3は、貴重な遊び場を奪われてしまった子どもたちの様子を描いたものである。

#### 引用3

The poor children had now nowhere to play. They tried to play on the road, but the road

was very dusty and full of hard stones, and they did not like it. They used to wander round the high wall when their lessons were over, and talk about the beautiful garden inside. “How happy we were there,” they said to each other. (p.164) (下線筆者)

下線部の「僕たちはあの庭でなんて幸せだったんだろう」という子どもたちの（嘆きの）声は、引用1の最後における「僕たちはこの庭でなんて幸せなんだろう」という（喜びの）声とまさに好対照をなす。あの庭（there）／この庭（here）、過去（were）／現在（are）との対比を通して読者は、子どもたちの幸せが空間・時間の両面において遠いものになってしまったことを知る。

次の引用4の冒頭にあるように、季節が春になっても巨人の庭には春が訪れることはなく、ずっと冬が居座ったままである。

#### 引用4

Then the Spring came, and all over the country there were little blossoms and little birds. Only in the garden of the Selfish Giant it was still winter. The birds did not care to sing in it as there were no children, and the trees forgot to blossom. Once a beautiful flower put its head out from the grass, but when it saw the notice-board it was so sorry for the children that it slipped back into the ground again, and went off to sleep. (p.164) (下線筆者)

下線を引いてある二つの接続詞（“as”と“that”）に注目したい。いずれも因果関係を示している。“as”は、「子どもたちが居なかったので、鳥も庭でさえずる気にならなかった」という意味で使われている。“that”は、前の行の“so”と呼応しながら、「（立ち入り禁止の）看板を見た花は子どもたちをあまりにも憐れんだ。だから地中に戻って眠りに就いてしまった」という意味で使われている。つまり、子ども・鳥・花は連鎖しているのである<sup>4</sup>。巨人は子どもたちを庭から追い出してしまった。結果、鳥や花、ひいては春そのものも追い出してしまったのだ。

春のみならず夏と秋も巨人の庭を訪れることはない。

#### 引用5

But the Spring never came, nor the Summer. The Autumn gave golden fruit to every garden, but to the Giant's garden she gave none. “He is too selfish,” she said. So it was always Winter there, and the North Wind, and the Hail, and the Frost, and the Snow danced about through the trees. (p.165)

ここで、春・夏・秋がひとつにまとめられ、このまとまりと冬との間に一線が引かれていることに気付く。引用1でも、桃の木の「花」と「果実」とが同じ文の中で表現され、春（花）から秋（果実）までの季節がひとまとめで捉えられていた（[T] here were twelve peach-trees that in the spring-time broke out into delicate blossoms of pink and pearl, and in the autumn bore rich fruit.）。春には花が咲き、夏を経て、秋には実を付けるという一連の流れは、誕生・成長・成熟という生命の流れを想起させる。そして、生命の流れを想起させる春・夏・秋と冬とが対立するものであれば、冬は死を想起させるということになる<sup>5</sup>。春・夏・秋／冬の対立から、生／死の対立を読み取ることが出来る。

巨人は、庭から子どもたちを追い出すことで、花・鳥・春・夏・秋・生命をも追い出してしまった。しかし、このような巨人に転機が訪れる。子どもたちが、庭を囲む壁に小さな穴をあけて巨人の庭に「侵入」したのである。この転機となる場面以降を、本論は作品“The Selfish Giant”の後半部と位置付けている。項を改め後半部の読解へと移りたい。

### 第3節第2項 “The Selfish Giant” 後半部の読解

元来、巨人は自分の庭に春が訪れることを望んでいた<sup>6</sup>。一方で、子どもたちが庭に入ってくることは拒んできた。巨人にとっては皮肉なことであるが、はねつけていた子どもたちが庭に侵入してきたことで、待ち望んでいた春が庭に訪れる。

#### 引用6

What did he see?

He saw a most wonderful sight. Through a little hole in the wall the children had crept in, and they were sitting in the branches of the trees. In every tree that he could see there was a little child. And the trees were so glad to have the children back again that they had covered themselves with blossoms, and were waving their arms gently above the children's heads. The birds were flying about and twittering with delight, and the flowers were looking up through the green grass and laughing. It was a lovely scene, only in one corner it was still winter. It was the farthest corner of the garden, and in it was standing a little boy. He was so small that he could not reach up to the branches of the tree, and he was wandering all round it, crying bitterly. The poor tree was still quite covered with frost and snow, and the North Wind was blowing and roaring above it. “Climb up! little boy,” said the Tree, and it bent its branches down as low as it could; but the boy was too tiny. (p.166) (下線筆者)

引用冒頭の“What did he see?”という問いかけは、2行目の“He saw a most wonderful sight.”という文、さらには3行目の“In every tree that he could see there was a little child.”という文へと続いていく。注目すべきは、4行目の“And the trees were so glad …”。以降、巨人を指す語が消滅している点である。結果、われわれ読者は、巨人が見ていることを直接目の当たりにしているような気になる。換言すると、4行目以降は巨人の視点から描かれていると考えられる。引用6で巨人が見たものは大きく二つある。(1) まず、巨人は次のような様子を目の当たりにする(一つ目の下線部)。

- ・「子どもたちが戻って来たことを喜ぶ木が、満開の花をつけ、子どもたちの頭上で枝をやさしく揺らしている」様子
- ・「鳥が、喜びのさえずり声をあげながら飛び回っている」様子
- ・「花が、芝生から顔をのぞかせて笑っている」様子

子ども・鳥・花が連鎖していることは、引用4の読解で触れた通りである。その連鎖を目の当たりにした巨人は、諸要素が互いに関連し合ってひとつの調和を成すことに気付いたのではなかろうか。つまり、自分の幸せには他者の存在が必要であり、他者が幸せになって初めて自分も幸せ

になれることに気付いたのではあるまいか。(2)(1)と関連して、巨人が見たことがもうひとつある。二つ目の下線部に着目したい。庭の一番隅っこがまだ冬であること、「小さな少年」(a little boy)が木に登れないために激しく泣いていること、少年を枝にのせていない木が霜・雪・北風にさらされていることを巨人は見る。つまり、(1)で触れた調和にはそれを構成する諸要素が不可欠であり、ゆえに子どもという要素を欠いている木やその周りには決して春が来ないことに巨人はようやく気付く。

ここで引用2,3に戻りたい。このふたつの引用は作中でも連続している。引用2,3を続けて読んで分かるのは、巨人の視点を意識させるような表現が無く、終始全知の語り手の視点から出来事が描かれているということである。引用3の最初の文に含まれる“poor”という語に着目したい。例えば、Louiseが“Poor Masao.”と言った場合、この表現にはマサオに対するルイーザの同情が込められている。つまり、引用3における“The poor children had now nowhere to play.”という表現には、遊び場を奪われた子どもたちに対する全知の語り手の同情が込められているのだ。と同時に、子どもたちから遊び場を奪った巨人に対する全知の語り手の非難の念も読み取れる。

引用6にも二つ目の下線部中に“poor”という語が使われている。引用3と異なるのは、前述のように、引用6のこの部分は巨人の視点から描かれていることである。よって、“The poor tree was still quite covered with frost and snow, and the North Wind was blowing and roaring above it.”という表現には、厳しい冬に耐える木に対する巨人の同情の念が込められていると言えよう。巨人の同情は、木のみならずその木になかなか登れない少年にも向けられる。

#### 引用7

And the Giant's heart melted as he looked out. “How selfish I have been!” he said; “now I know why the Spring would not come here. I will put that poor little boy on the top of the tree, and then I will knock down the wall, and my garden shall be the children's playground for ever and ever.” He was really very sorry for what he had done. (p.167) (下線筆者)

引用6,7は作中でも連続しているが、引用7の下線部にも“poor”という語が使われている。これは巨人のセリフであり、ゆえに純粹に巨人の同情心を表現していると言える。これまで巨人は自分のことしか考えなかった。巨人が“selfish”とされてきた所以である。しかし、ここに至ってやっと、自分以外の存在を思いやる気持ちが巨人に芽生えたのだ。これまでのわが身を振り返りながら巨人は、「俺はなんて我がままだったんだろう！」と引用7でも嘆いている。

引用7の最初の文中の“melted”という語は、巨人の改心を比喩的に表わす動詞として使われている。もちろんこの語は巨人の庭を年中覆っていた霜・ひょう・雪を想起させる。子どもたちが庭に入ってきたことによって、霜・ひょう・雪も、巨人の硬く冷たい心もようやく「融けた」のだ。

融けるのは霜・ひょう・雪や巨人の心のみではない。作品前半部を扱った前節では、美しい音／耳障りな音、壁の内／外、自／他、あそこ／ここ、過去／現在、春・夏・秋／冬、生／死といった様々な対立があることを見た。巨人の改心後、対立項間の境界が「融け」、それまでは対立していた二項が融合するようになる。自力では木に登ることが出来ない少年を助けるべく巨人は庭に出る。

#### 引用8

So he crept downstairs and opened the front door quite softly, and went out into the garden. … And the Giant stole up behind him and took him gently in his hand, and put him up into the tree. (p.168) (下線筆者)

四つの下線部から、少年を驚かすまいとする巨人の気遣いが読み取れる。引用2では、巨人の声が“gruff”であること、そしてその「耳障りな声」が鳥の「美しい声」、ひいては引用1で見た庭全体の調和と対立していることを指摘した。引用8の“softly”や“gently”は、巨人の声ではなく動作を表現したものである。しかし、少年を気遣う巨人から粗野なところが消え、引用1や引用6(の一つ目の下線部)の庭の心地よさと巨人とが一体になろうとしていることがわかる。庭の心地よさ／巨人の粗野さの二項が融合しようとしている。

少年は巨人によって木に登ることが出来た。すると、一本だけ冬の厳しさに耐えていた木にも花が咲き、鳥が止まってさえずるようになる。作中でも、上の引用8と次の引用9は連続している。

#### 引用9

And the tree broke at once into blossom, and the birds came and sang on it, and the little boy stretched out his two arms and flung them round the Giant's neck, and kissed him. And the other children, when they saw that the Giant was not wicked any longer, came running back, and with them came the Spring. “It is your garden now, little children,” said the Giant, and he took a great axe and knocked down the wall. (p.168) (下線筆者)

下線部の巨人の言動は引用2における巨人の言動と好対照をなす。引用2では、「私自身の庭は私自身の庭である」と言って、「自分の庭のまわりに高い壁を設けた」わけであるが、引用9では「さあ子どもたち、もうこの庭は君たちのものだよ」と言って、「大きな斧を取り出して壁を打ち壊してしまった」のである。これまで内と外とを隔てていた壁が取り除かれ、壁の内／外、あそこ／ここという対立が消滅する。また、自分のもの／人のものといった自／他の対立も無くなる。

注6の引用にあるように、かつて巨人は自分の庭が年中冬であることを嘆いていた。しかし、改心後の巨人は冬の時期を次のように見なすようになる。

#### 引用10

He did not hate the Winter now, for he knew that it was merely the Spring asleep, and that the flowers were resting. (p.169)

冬は来るべき春の準備期間であると見なされている。引用5では、春・夏・秋／冬が対立していることを見た。その対立が消え、四季は融合し、ひとつの連続体となる。

巨人によって木にのせてもらった少年は、その時以来何年も巨人の庭に姿を見せない。その少年がある冬の朝ひょっこりと戻ってくる。巨人は驚くと同時に狂喜する。しかし、その喜びはすぐに怒りへと変わる。



## 引用11

Downstairs ran the Giant in great joy, and out into the garden. He hastened across the grass, and came near to the child. And when he came quite close his face grew red with anger, and he said, “Who hath dared to wound thee?” For on the palms of the child’s hands were the prints of two nails, and the prints of two nails were on the little feet.

“Who hath dared to wound thee?” cried the Giant; “tell me, that I may take my big sword and slay him.”

“Nay!” answered the child; “but these are the wounds of Love.”

“Who art thou?” said the Giant, and a strange awe fell on him, and he knelt before the little child.

And the child smiled on the Giant, and said to him, “You let me play once in your garden, to-day you shall come with me to my garden, which is Paradise.”

And when the children ran in that afternoon, they found the Giant lying dead under the tree, all covered with white blossoms. (p.170) (下線筆者)

これで “The selfish Giant” は完結する。この最終場面でまず読者の注意を引くのはいわゆる “internal deviation” である<sup>7</sup>。つまり、これまで作中には見られなかった古い英語の使用に気付く。教科書 *Polestar* には次のような説明が付いている。

Who hath dared to wound thee? = Who has dared to wound you?

Who art thou? = Who are you?

この説明で「文字通りの意味」はもちろんわかる。しかし、言語が逸脱している以上、そこには何か特別な意味が込められているとは考えられないだろうか。

引用11の三つの下線部はいずれも巨人が発したセリフである。各セリフの前後を見てみよう。一つ目のセリフの直前には「巨人の顔は “anger” で真っ赤になった」とある。また、二つ目のセリフの直後に巨人は「お前を傷つけたやつを大刀で殺してやるから、そいつが誰かを言ってくれ」と叫んでいる<sup>8</sup>。よって、“Who hath dared to wound thee?” というセリフは、巨人の激しい怒りから発せられたと考えられる。一方、三つ目のセリフの直後には「得体のしれない “awe” が巨人を襲った」とある。以上から、“anger” にせよ、“awe” にせよ、激しい感情を抱いた時、巨人は古い英語を使う傾向にあると言える。

巨人の激しい感情を表現すること以外に、“internal deviation” の部分が含み持つ意味は無いだろうか。そもそも巨人が怒りに燃えたのは、愛する子どもの両手両足に計四つの釘の傷跡があることに気付いたからである。激しい怒りにかられた巨人はかたきを討つことを提案する。しかし、かたき討ちの提案を受けた子どもは「ダメ！だってこれは愛の傷だから」と答える。その瞬間、巨人の感情は、怒りから “awe” に変わる。なぜか。

“awe” とはそもそもどのような感情であろう。 *Oxford English Dictionary* 第1版によると次のような定義がある。

Dread mingled with veneration, reverential or respectful fear; the attitude of a mind subdued

to profound reverence in the presence of supreme authority, moral greatness or sublimity, or mysterious sacredness.

日本語の「畏敬」に近いと思われる。子どもに対し畏敬の念を抱いたために、巨人は「その小さな子どもの前にひざまずいた」と解釈出来よう。では、なぜ畏敬の念を巨人は子どもに対して抱いたのか。次のように解釈出来ないだろうか。つまり、かたき討ちの提案を退け、傷を愛だと断言する子どもに（その正体が何であれ）、巨人は圧倒的な度量の大きさを感じ取ったのだ、と。

改心後の巨人は子どもたちのことが大好きになる。しかし、自分が木にのせてあげた子どものことを巨人は特に好きになる。それには理由がある。つまり、「巨人がこの子を一番愛したのは、この子が自分にキスをしてくれたから」(The Giant loved him the best because he had kissed him. (p.168))である。「キス」という愛情を表現する行為を受けて、巨人がこの子どもを特に気入るのは当然のことかもしれない。しかし、自分に愛情を注いでくれるから好きになるというのは、逆の行動（つまり、自分を傷つける相手のことは憎み、敵対視するという行動）を取る危険性をはらんではいまいか。傷を負った子どもは、自分の傷が愛の傷だと言って、復讐することを巨人に思いとどまらせる。誰かから攻撃を受けたからといって、その誰かを敵とみなし、仕返しを図るのは愚かしいことである。敵／味方に対立し、やられたらやり返すという思考を持つのではなく、あらゆるものを愛すべきである。このことを子どもは巨人に伝えたかったのではあるまいか。

最後に、引用11の最後の文（すなわち“The Selfish Giant”の最後の文）に触れよう。巨人の庭を訪れた子どもたちは、巨人が「全身を白い花で覆われて」木の下に横たわって死んでいるのを発見する。この“white blossoms”という表現に着目したい。これは巨人の庭にある桃の木の花のことだと思われるが、引用1では“delicate blossoms of pink and pearl”とあった。「桃色」もしくは「真珠色」を帯びているとされていた桃の花の色が、作品の最終文では「白色」に変わっている。この最終文を除き白色は作中で二度使われている。つまり、“white cloak”と“cold white garden”であるが、これらはいずれも雪の白さを表現するものであった<sup>9</sup>。最終文では、巨人が「死んで」(dead) いるとはっきりと書かれている。死体を覆う花の色として、雪・冬さらには死を想起させる白色が使われているのは適切であろう。しかし、その白色が春、さらには生を想起させる花と結びつくことで、巨人が死／生の対立をも超越した世界へと旅立ったとは読み取れないだろうか。

#### 第4節 “The Selfish Giant” 読解において F on F を実践するための発問

前節で行った“The Selfish Giant”の読解を基に、本節では F on F を実践するための発問を作成する。作成された計17の発問を通して、前節での読解の主要な部分が浮かび上がってくることを意図している。発問1～17を介して学習者に読み取らせたいポイントは以下の通り。

- 問1 ・ “The Selfish Giant” の語り
- 問2 ・ 巨人の帰宅前における庭の調和
- 問3～7 ・ 巨人の帰宅による庭の調和の乱れ ・ 対立的諸要素の発生
- 問8～10 ・ 巨人の改心
- 問11～14 ・ 諸要素間の対立の消滅 ・ 庭の調和の復活

問15～17 ・子どもに対する巨人の畏敬の念

計17の発問の全てが言語形式のみに焦点を当てているわけではない。本論がF on Fの定義を依拠している Long and Robinson (1998) も, “attention to forms and attention to meaning are not always mutually exclusive” (第1節の引用参照) と言っているように, 言語形式と意味内容は「いつも互いに相容れないわけではない」のである。発問を作成した筆者自身としては, 約半分に当たる計8の発問(発問3, 4, 6, 8, 9, 10, 15, 16)が特に言語形式に焦点を当てたものであると考えている。しかしながら, 他の発問も, テキスト中の言語を手掛かりとして答えるべきものであることに変わりはない。

発問への取り組み方については本論では扱わないが, 適宜, ペアやグループによるワークを取り入れたり, 辞書の使用を認めたりすること等が考えられる。なお, 本節でも前節の引用1～11に言及する。ただし, 前節で筆者が引用中に引いた下線は, 本節では無いものとする。

問1	物語“The Selfish Giant”の語り手を次の中から選びなさい。 1. 登場人物である「巨人」 2. 全知の語り手: 作中の出来事や登場人物の感情など, 文字通り「全てを知っている」語り手。例としては, 『桃太郎』の語り手。 3. 作者オスカー・ワイルド
解答	2. 全知の語り手

問2	引用1のはじめの文では, 巨人の庭が“lovely”であると表現されています。その庭の具体的な様子は, 2文目以降で花・木・鳥・子どもたちによって示されています。引用1における花・木・鳥・子どもたちの様子をそれぞれ説明しなさい。
解答例	花: 星のようにきれいな花が咲いていた。 木: 12本の桃の木があり, 春には花を咲かせ, 秋には実をつけた。 鳥: 鳥が木に止まり, とても美しい声でさえずっていた。 子どもたち: 「自分たちはなんて幸せなんだろう」と口にしていた。

問3	引用1では, 巨人の庭全体が, 心地よさを指向しながら, 調和を保っていました。しかし, その調和は巨人の帰宅によって乱されます。引用2では巨人の声が“gruff”であると表現されていますが, そのような声とは相容れない音を引用1から抜き出しなさい。
解答	sweetly

問4	引用1では, 庭の諸要素は互いに対立することなく調和を保っていました。しかし, 巨人の帰宅後, 庭には二項対立(例: 美/醜)が見られるようになります。引用2の“My own garden is my own garden”という巨人の言葉が含み持つ二項対立は何ですか。
解答例	自分の庭は自分のものであり他の人のものではないという, 自/他の二項対立。

問5	巨人は自分の庭の内／外という二項をはっきりと対立させます。そのために巨人が取った手段を、引用2を参考に答えなさい。
解答例	庭の周りを高い壁で囲い、「立ち入ったものは法的に訴える」という看板を立てた。
問6	引用3で、庭から追い出された子どもたちは“How happy we were there”と自らを表現しています。(1) この表現と対をなす表現を引用1から抜き出さない。(2) また、ふたつの表現を比べ、二項対立になっている箇所をふたつ挙げなさい。
解答例	(1) “How happy we are here!” (2) 引用1の“are”という現在形と、引用3の“were”という過去形。 引用1の「ここ」と、引用3の「あそこ」。
問7	引用5では、四季が二項に分けられています。どのように分けられていますか。
解答例	春夏秋／冬の二項に分けられている。
問8	引用6は“What did he see?”で始まっていますが、それに続く長い段落では、巨人が見たものが描かれています。巨人の視点に立って“The poor tree was still quite covered with frost and snow....”という文を読んだ時、何を読み取ることが出来ますか。
解答例	・木のことを「可哀想」(poor)に思う巨人の同情心。 ・庭を独り占めしていたことに対する巨人の自責の念。
問9	引用3でも“poor”という語が使われていました。この時の“The poor children had now nowhere to play.”という表現において、子どもたちを憐れんでいるのは誰だと思えますか。
解答	全知の語り手
問10	引用6の情景を目の当たりにした巨人は改心します。その改心は、引用7の冒頭で“melted”と表現されています。この語が含み持つ意味を考えなさい。
解答例	“melted”という語は、巨人の改心と、それに伴う庭の雪「融け」を同時に表現している。
問11	巨人の改心後、対立する諸要素が消えていきます。引用2の“My own garden is my own garden”という巨人のセリフが含み持っていた二項対立(問4参照)も消えますが、このセリフと好対照をなすセリフを引用7以降(引用7を含む)の本文から抜き出さない。
解答	“It is your garden now, little children”(引用9参照)
問12	問5では、巨人が自分の庭の内／外の境界を明確にしたことについて触れました。その境界を巨人は改心後には取り払います。そのために巨人が実際に取った行動を、引用7以降の本文から抜き出さない。
解答	he took a great axe and knocked down the wall. (引用9参照)

問13	問7では、四季が二項に分けられていることに触れました。しかし、改心後の巨人は、四季を連続したものとして見なすようになります。それがうかがえる文を、引用7以降の本文から抜き出さない。
解答	He did not hate the Winter now, for he knew that it was merely the Spring asleep, and that the flowers were resting. (引用10参照)

問14	引用9における巨人の庭の描写と同じような描写を、引用5以前(引用5を含む)の本文から抜き出さない。
解答	引用1の文章

問15	引用11では、これまでとは明らかに異なる英語を巨人は3回にわたって使用しています。1, 2回目は同じ“Who hath dared to wound thee?”という英語ですが、このセリフを発した時の巨人の気持ちを言語的な根拠とともに説明しなさい。
解答例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ “his face grew red with anger” とあるように激怒していた。それは、巨人が “tell me, that I may take my big sword and slay him.” と言っていることにも明らかである。</li> <li>・ “his face grew red with anger” に続いて “tell me, that I may take my big sword and slay him.” とあるように、復讐心に燃えていた。</li> </ul>

問16	引用11には、“Who art thou?”というセリフを発した巨人が“awe”に襲われたとあります。(1)“awe”はどのような感情なのか、英英辞書を使って説明しなさい。(2)また、敢えて“awe”を日本語にすると、どういう訳が適切だと思われませんか。
解答例	<p>(1) “awe”は“feeling of respect combined with fear and wonder”であり、恐れや驚きの中に「敬意」の念を含んでいる。他の例文としては、“Her first view of the pyramids filled her with awe.”などが考えられる。(“awe”の定義と用例はいずれも <i>Oxford Advanced Learner’s Dictionary</i> 第4版から。)</p> <p>(2) 「畏敬」という訳が適切だと思われる。</p>

問17	巨人が“awe”を感じた原因は、子どもの“Nay! … but these are the wounds of Love.”というセリフにあると思われませんか。もしそうであるならば、なぜそのセリフによって巨人は“awe”を抱いたのだと思いませんか。
解答例	子どもは、自らの傷を「愛の傷」だと言って、巨人が申し出る復讐を拒む。その子どものスケールの大きさに巨人は圧倒されたと思われるから。

## 第5節 おわりに

昨今の実践的英語コミュニケーション能力重視の中で、文学は英語教材として不人気であり、検定教科書においても文学を元にしたレッスンは減少の一途をたどっている(江利川, 2004)。その一方で、文学に対して肯定的な意見を持つ中高の英語教員が存在するのも事実である。例えば、小澤・幡山(2010)が行ったアンケート調査において、4件法によるアンケート項目「中学校・高等学校の英語の授業で「文学的教材」を扱うことは大切だと思いませんか」に対し、肯定的

な回答（「強くそう思う」か「そう思う」）を寄せた中学校教員（全45名中）、高等学校教員（全28名中）はそれぞれ87%、82%だった。しかしながら、そういった英語教員も、多くが「文学の扱い方がわからないと感じている」のが現状であろう（海木・斎藤・中村・室井、2004）。

中高の英語の授業で文学を扱いたいと望む一方で、そのやり方がわからないという現状を受け、本論では、物語文読解の際に F on F を取り入れた発問を活用することを、文学のひとつの扱い方として提案した。このような発問による物語文読解によって、学習者の英語学力が実際に向上するかどうかの検証は本論では扱わなかったが、今後の課題としたい。

\*本論は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））研究課題番号23520305「英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究」（研究代表者：小野 章）の補助を受けて執筆された。

## 注

1. 本論は、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期在学中の宇山公曉氏と行っている共同研究から派生したものである。テキスト（“The Selfish Giant”）の選定は宇山氏が行った。
2. 例えば、ロラン・バルトは“The Death of the Author”（1968）の中で文学テキストを次のようにとらえている。

We know now that a text is not a line of words releasing a single ‘theological’ meaning (the ‘message’ of the Author-God) but a multi-dimensional space in which a variety of writings, none of them original, blend and clash. (p.170)

3. 本節における作品“The Selfish Giant”からの引用1～11は、高等学校英語教科書 *Polestar: English Communication I* に掲載されている同作品（原文）からの引用である。引用箇所について括弧内に教科書の該当頁数を示す。
4. 引用1で見た芝生・花・果実・鳥・子どもたちのハーモニーも、引用4における連鎖を裏付けている。
5. ただし、引用5に“So it was always Winter there, and the North Wind, and the Hail, and the Frost, and the Snow danced about through the trees.”とあるように、冬（あるいはその仲間である北風、ひょう、霜、雪）そのものは「木々の間を踊り狂った」わけであり、死に伴う活動停止状態とは結びつかない。むしろ、その破壊力によって周りを死に至らしめるという意味で、冬は死と結びついていると思われる。引用5の直前には屋根スレートを破壊するひょうの様子（So the Hail came. Every day for three hours he rattled on the roof of the castle till he broke most of the slates....）が描かれている。
6. 引用5の直前の段落には次のような記述があり、巨人が春の訪れを待ち望んでいたことがわかる。  
“I cannot understand why the Spring is so late in coming,” said the Selfish Giant, as he sat at the window and looked out at his cold white garden; “I hope there will be a change in the weather.”
7. “internal deviation”（内的逸脱）とは、テキスト内において構築された規範からの逸脱のこと。詳しくは、Levin, S. R. (1965). Internal and external deviation in poetry. *Word*, 21(2), 225-237.

8. “tell me, that I may take my big sword and slay him.” という巨人のセリフ中の “that” は接続詞であり, “so that” と同じように “may” と呼応して「～出来るように」という意味になると思われる。
9. “white cloak” に関しては次の引用を, “cold white garden” に関しては注6の引用を参照されたい。  
The Snow covered up the grass with her great white cloak, and the Frost painted all the trees silver. (p.164)

## 引用文献

- Barthes, R. (1988). The death of the author. In D. Lodge (Ed.), *Modern criticism and theory* (pp. 167-72). New York: Longman. (Original work publish 1968)
- Doughty, C., & Williams, J. (1998). Issues and terminology. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 1-11). Cambridge: Cambridge University Press.
- Long, M. H., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 15-41). Cambridge: Cambridge University Press.
- 海木幸登・斎藤兆史・中村哲子・室井美稚子 (2004). 「文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活かすか？」『英語教育』10月増刊号, 6-14.
- 江利川春雄 (2004). 「英語教科書から消えた文学」『英語教育』53(8), 15-18.
- 小澤浩美・幡山秀明 (2010). 「英語教育と文学的教材 [11] ー学習指導要領と文学的教材ー」『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』第33号, 315-20.
- 高等学校英語教科書 *Polestar: English Communication I*

## ABSTRACT

### Designing Teacher Questions to Implement Focus on Form in Reading Stories

Akira ONO

The Graduate School of Education, Hiroshima University

This paper owes the definition of “focus on form” to Long and Robinson (1998): “[D]uring an otherwise meaning-focused classroom lesson, focus on form often consists of an occasional shift of attention to linguistic code features . . . .” The aim of this paper is to design teacher questions which will help implement Focus on Form (F on F hereafter) in the reading class. The text to be read is “The Selfish Giant” by Oscar Wilde, which is in *Polestar: English Communication I*, a MEXT-authorized senior high school English textbook. The research procedure is as follows:

- (1) Analysis of “The Selfish Giant” as it appears in *Polestar: English Communication I*
- (2) Reading of “The Selfish Giant”
- (3) Designing teacher questions for the implementation of F on F

The results are as follows:

(1) *Polestar: English Communication I* does not include “The Selfish Giant” in its ten “Lessons” but has it as a “Further Reading.” The whole of the original “The Selfish Giant” is put with a word list and some explanation on such expressions as “to-morrow” and “Who art thou?” Attached to the text is “COMPREHENSION.” It consists of “Summary,” “Check for understanding,” and “Let’s try,” which have 5, 4, and 1 question(s), respectively. The point is that all the questions in “COMPREHENSION” direct our attention just to the meaning of the text, not to “linguistic code features” in Long and Robinson’s term.

(2) Questions asked by a teacher should be based on his/her reading of a text. So it would be necessary for us to have read “The Selfish Giant” in our own way. At the beginning of the story there is a kind of harmony in the Giant’s garden with children, flowers and birds affecting one another. The harmony is destroyed when the Giant comes home, his castle. He has a “very gruff” voice which stands in stark contrast to “lovely” elements in the garden. He builds a high wall around the garden so that children cannot play in it. Harmony being destroyed, we start to detect dichotomous elements: inside and outside; mine and yours; the past and the present; winter and the other three seasons; life and death. The turning point in the story is when children creep into the garden through a little hole. As the Giant sees a tree bending its branches so that “a little boy” can reach up to them, his heart eventually “melts” and he feels really sorry for his selfish behavior. Not only his heart but also the boundaries between dichotomous elements “melt.” Harmony comes back to the Giant’s garden.

(3) The 17 questions proposed are based on the reading in (2). All the questions should be



answered with “linguistic code features” in the text as a clue. Questions 3, 4, 6, 8, 9, 10, 15 and 16 are particularly intended to direct our attention to form.